「親と子の主体性育成を目的とする子育て支援に関する研究」学位申請論文要旨

関西福祉科学大学大学院　社会福祉学研究科　臨床福祉学専攻

寺田　恭子

１．研究目的

少子化対策の一環として「子育ての社会化」が政策に謳われて久しい。2012 年に子ども・子育て新システムがつくられ、子ども・子育て支援法が成立するに至っている。しかし、児童虐待件数の増加、いじめやひきこもり、不登校の増加など、子育て家庭や子どもの育ちの厳しい現実を踏まえると、子育て支援サービスの拡充による「子育ての社会化」に関する議論とはまた別の、異なる位相の議論が求められていると考える。

本研究の目的は、人が生来持ち備えている「主体性」に着目し、その「主体性」がもつ実存性から、子育て支援の目標と、目標を達成するための課題を検討することである。本研究は、研究対象である親と子を、家族というシステムの中の構成要素として位置付けたこと、人と人の交互作用としての「適応」への支援プロセスに関する実証研究であること、世代サイクルの循環が成熟と適応的調和をもたらすというエリクソンの考えに論拠を置いていること、からライフモデルの発展形として位置づけた。

２．論文の概要

本研究は七章構成である。

「第Ⅰ章　人の主体性と富裕化社会における子育て」において、先行研究に基づき、本研究のキーワードである「社会的存在」と「人の主体性」について定義した。本研究における社会的存在とは「『互恵的な利他性や協同性が機能する人同士の共同体』をつくることで自己の主体性の完成をめざす存在」であること、「主体性」概念については、鯨岡峻と畠中宗一の理論から、人の主体性は、自己充実欲求に基づいた主体性＝自身の気持ちや想いに関心を置き自己を貫きたいという主体性＝「自己充実主体性」と、繋合希求性に基づいた主体性＝相手の気持ちや想いに関心を置き相手を信頼し寄り添いたいという主体性＝「繋合希求主体性」から成り立ち、自己と他者の主体性が弁証法的発展変容していく「相互主体性」によって、人の主体性は確立されていく、つまり、社会的存在である人は誰でも「相互主体性」を前提とした主体性をもっている、と定義した。そして、相互主体的な関係性の中にアイデンティティという感覚が育ち、アイデンティティと主体性は相互に作用し合い、それぞれ確立されていくと位置づけた。

経済の高度化に伴う富裕化の中で、自己充実主体性だけが肥大化し、他者に関心をもてない主体性を作り出している現代社会において、人間らしい「生きる喜び」について、本研究では、人が「生きる喜び」を求める主体性をもつこと、その「生きる喜び」とは社会的存在になるべく、つまり、「互恵的な利他性や協同性が機能する人同士の共同体」をつくることで、自己の主体性の完成をめざす存在であることに「生きる喜び」を求める存在であることと解釈した。

人間本来が持っている主体性が、自己と他者の関係性が相互に作用する中で培われてきたものであること、そして自己の主体性の中に他者との関係性が内在していることを前提に、他者と「共に生きる」なかでの「生きる喜び」を希求する子どもに育つための子育て支援という視点から論を展開していきたいと本研究を位置づけた。

「第Ⅱ章　地域の子育て支援者が感じる『気になる』子育て家庭」では、2009 年度大阪府調査研究プロジェクト「親と子のあゆみはぐくむプロジェクト」における子育て支援者の共同主観である子育て支援者が感じる「気になる」55 項目に着目し、「他者との関係性に自己の主体性が内在する」の視点から、現代の親と子の主体性がもつ問題のありようを分析した。調査結果を他者との関係性という視点に立って「子どもと子ども」「親と子ども」「親と他者」という関係性の所在に分類した結果、「親と子ども」「親と他者」における関係性の「気になる」問題の所在や、「子どもと子ども」の関係性における「気になる」問題の所在から、子育て支援者の気になる「共同主観」の最終的な行き先は、親がもつ主体性のありようのアンバランスであり、そのアンバランスによって子どもの育ちにリスクが生じる可能性がある場合に、子育て支援者は、危機感として「気になる」という共同主観をもつのだと捉えた。

調査結果から求めた「気になる」と感じる親のキーワードである「親役割」「自己の気持ちや想いへの関心」「親の子どもへの関心」「社会的関係性におけるスキル」「他者との相互関係性」に視点を置いて、親の主体性のアンバランスを分類すると、「親役割への関心が弱く、子どもへの関心も弱い」「自己の想いや気持ちへの関心が過剰に強い」「親自身の自己が確立しておらず、子どもとの関係性にのみこまれている」があげられた。そして、この親の主体性のアンバランスを主体として捉えた場合、子育て支援者の「気になる」は、子育て支援者に「気づいて」サインとして発信していると捉える必要があること、そして、「親の主体性」と「親と子の関係性」、「親と他者との関係性」の三者には、それぞれ相互関係があり、それぞれを調整し、親と子の関係性が安定する支援＝親と子の相互主体性が

機能する関係性をつくることが、子育て支援の課題だと考察した。

「第Ⅲ章　親の主体性における『親アイデンティティ』と子育て支援」では、第Ⅱ章の調査研究の翌年に実施した 2010 年度大阪府「親と子のあゆみはぐくむプロジェクト」の利用者（親）調査結果を親の主体性の視点から捉え直し、そこに起点を置く子育て支援の課題を検討することを目的とした。親の「今後必要だと思う子育て支援の課題」における自由記述の分析方法としては、萱間真美の質的分析法（グランデット・セオリー・アプローチ）を参考にした。その結果、10 のサブカテゴリが抽出され、さらに焦点化コーディングした結果、「地域の親子との社会的関係」「親役割の達成」「自己の確立」という 3 つのカテゴリが抽出された。そして、カテゴリの中で自由記述の全スライス文書数の 72.8%を占める「親役割の達成」に着目し、多くの親は親役割を受容し親役割の遂行の積み重ねによって、「親アイデンティティ」を構築したいと願っていることを導き出した。そして、親は、親自身のそれまでの自己のアイデンティティと、親自身が心の中で抱く親アイデンティティの統合化を図るために、自らの主体性の枠組みの中で、親役割を遂行できる子育て支援サービスを求め、親アイデンティティの確立をめざしていると考察した。また、本研究では、「親アイデンティティ」を「親役割に基づく親意識の一貫性と連続性を子どもと共有することによって発生する自分が親であるという感覚である」と定義し、親は親アイデンティティの確立を目的として「親と子の関係性」の安定を求めて子育て支援サービスを必要としているのではないか、「親と子の関係性」における安定は、親と子が相互主体的な関係性にあるとき、親と子の関係性は安定し、親アイデンティティも構築されると考察した。親がそれぞれの主体性に基づき自身の親アイデンティティの確立を目的とする子育て支援サービスを選択できるような子育て支援サービスの量と質の供給、そして、親と子の相互主体的な関係性が構築できるような子育て支援者の視点を課題とした。

「第Ⅳ章　『親と子の関係性』に着目した「親と子の主体性」育成を目的とする子育て支援の実践研究」では二つの事例を取り上げた。

１.「０歳から２歳」を対象とする事例では、乳幼児期の「しつけ」を地域の子育て家庭と共有する取り組みを行った。本研究では、地域における「しつけ」の共有化によって、「地域の支援者や他の親」の主体性と親の主体性の相互作用が生まれ「親の主体性」が発達する、発達した「親の主体性」が「子どもの主体性」に働きかけ、その結果、「子どもの主体性」が育つのではないか、という家族システム論に基づいた仮説をたてた。本研究の目的はその仮説の検証ということである。研究の前段階として、乳幼児期の子どもを育て

る親の「しつけ」を求める意識や感情を明らかにするために「親アンケート調査」を実施した。カテゴリカル回帰分析によって「子どもが思い通りにならないときに感情的に怒って後悔することがある」が「しつけ」の関心度に有意な影響があることが示された（$p < 0.001$）。そして、この項目と「子育てにおける感情や意識」項目を Speaman の相関分析をしたところ、「子どもを虐待しているのではないかと思う」に中程度の相関関係がみられ（$r = 0.536$　$p < 0.01$）、「感情的に怒ることが虐待につながるのではないか」という、親たちの新たな育児不安が確認された。

「感情的に怒らない子どもの主体性を認める」しつけに取り組むために、行動理論に基づいた親支援プログラムを活用しながら、地域で「親の主体性」に働きかける「しつけ」に取り組んだ。受講後の親アンケート調査結果を因子分析（主因子法　Promax 回転）したところ、親の変化として「子どもの主体受容」「親効力感の向上」「自尊感情の安定」「自己のふり返り」という４つの因子が認められた。地域の子育て家庭が「しつけ」を共有することによって、自己の「しつけ」へのふり返りだけではなく、他の親やスタッフとの相互作用により「親の主体性」が育ち、さらに親と子の相互作用によって「子どもの主体性」が育つ芽が示された。

２.「３歳から５歳」を対象とした事例では、保育所型認定こども園における保護者支援の取り組みから、「親と子の主体性が育ち合う」ための保護者支援の課題検討を目的として探りながら「親と子の主体性が育ち合う」ための子育て支援者（保育士）の役割を明らかにしたいと考えた。「事前保護者アンケート調査」によって保護者支援の仮説を導き出し、その仮説の検証を研修後保護者アンケート調査と保育士アンケート調査から求めた。事前保護者アンケート調査では、保護者の自分の子育てにおける「自己評価」を従属変数にとり、「親の感情や意識」を独立変数としてカテゴリカル回帰分析をしたところ、「私が親でよかったかなと思うときがある」（$p < 0.05$）、「子育てで子どもにすまないと思う面がある」（$p < 0.01$）、「子どもが言うことを聞かなかったり、悪いことをしたとき、感情的に怒ってしかる」（$p < 0.01$）が、「自己評価」に有意な影響を与えていることが明らかになった。さらに自己評価の理由をテキストマイニングで分析したところ、自己評価が低いほど「親」の否定的内容の割合が高い傾向にあり自己評価が高いほど「子ども」や「親（自分）」「家族全体」における肯定的内容の割合が高い傾向にあった。そのため、「親と子の主体性が育ち合う」保護者支援の目標は、「基本的自尊感情」＝親としての自分はこれでいいのだ、という親としての根源的本質的自己肯定感を育てることであり、その実践の柱として「子ども

の主体性の受容」＝「子どもへの肯定的まなざし」の意識化を仮説として位置づけた。そして、保育士による「親と子の主体性が育ち合う」保護者支援の課題として、「子どもへの肯定的まなざし」の意識化と「保育士と保護者の課題の共有化」を実践の柱とした。

親支援プログラム受講後の「研修後保護者アンケート調査」では、親たちが、親支援プログラムを基に親と子の主体性の相互作用について研修し家庭で約一か月実践した後、親と子どもの変化を自由記述で求めた。親の「子どもへの肯定的なまなざし」の意識化によって子どもの主体性を受容した結果、親と子の「基本的自尊感情」と「主体性」が芽生えていることが示された。

また、認定こども園において、保育士が「子どもへの肯定的まなざし」を意識化し、行動理論に基づいた親支援プログラムを活用した保育を、約一年間実践した後、「保育士アンケート調査」を実施した。自分（保育士）、子ども、クラス、親や親子関係の変化を「感じない」「あまり感じない」「少し感じる」「感じる」の順序尺度で問うたところ、自分（保育士）の変化を「感じる」（21.1%）「少し感じる」（63.2%）が示され、8割以上の保育士が自分自身の変化を感じていることが示された。さらに、自分（保育士）、子ども、クラス、親や親子関係の変化を「感じない」＝1、「あまり感じない」＝2、「少し感じる」＝3、「感じる」＝4として、自分（保育士）、子ども、クラス、親や親子関係の相関分析（Spearman）をしたところ有意な差が認められた。つまり、自分（保育士）、子ども、クラス、親や親子関係という関係において、相互の関係が有意に作用し合いながら変化していると感じていることが示された。本研究の結果から、親と子の「主体性」は、親と子だけの閉じられた関係性や相互性で完結するのではなく、親も子も社会的存在であるが故に、社会的環境と相互作用しながら育ち合うことを示唆する結果が得られたと考える。そして、保育士による「親と子の主体性が育ち合う」保護者支援の課題として、「子どもへの肯定的まなざし」の意識化と、「保育士と保護者の課題の共有化」がその第一歩であるという手がかりを得たと考える。

「第Ⅴ章　『親と子の関係性』の安定を支える地域における子育て支援の共有化」では、子育ての一断面である「食生活」を取り上げ、子育て家庭の生活課題である「食事づくりのつらさ感」に焦点をあてた。そして、その「つらさ感」を軽減するために親は、地域にどのようなサポートを求めているのか、を検証した。第Ⅲ章で導き出した「親アイデンティティ」と「親と子の関係性」、第Ⅳ章で導き出した「基本的自尊感情」を分析の枠組みとした。調査は、A地区の1歳6か月を育てる親を対象とし、親アンケート調査を実施した。

親役割の受容を明らかにするためにテキストマイニングによる分析を行った結果、親は親アイデンティの確立に向けて、親役割を果たすために前向きに努力していることが示された。次に、親の自尊感情と関連のある親の食事づくりの感情を明らかにするために、親の食生活における自己評価を従属変数とし、「食事づくりの感情の理由」を独立変数として、強制投入法により重回帰分析し、その結果「作っても子どもが食べない」に有意差が認められた。「作っても子どもが食べない」に対して親は地域にどのようなサポートを期待しているのかを明らかにするために、「作っても子どもが食べない」を従属変数とした「地域のサポート課題」について、強制投入法による二項ロジスティック回帰分析を行い、その結果として「地域における子育ての共有化」が導き出された。

考察として、親の自己評価は、親アイデンティティにおける自己評価でもあると捉えられ、それは、親としての基本的自尊感情の指数でもあるとも考えられる。「作っても食べない」という親と子の気持ちの相互作用がうまく機能しなくなったときに親の基本的自尊感情の指数が低くなると考えられる。また、「つらさ感」は、個体内関係性における自己との葛藤の結果生じる感情だと捉え、その感情の軽減として親は、「近所の親子が集まって食べる場」を求めたと解釈した。親が求めた地域のサポート課題である「近所の親子が集まって食べる場」は、地域の親と子育てを共有化することによって、親の基本的自尊感情を充足し、親の主体性のバランスをとることで親と子の関係性を安定させたい、という親自身の親アイデンティティを確立するために求めた結果なのだと考察した。

「地域における子育ての共有化」は、地域の親と子の主体性の相互関係がつくられる場であり、子育てという日常性の中で地域だからこそ成立する関係性である。その「地域の親と子の相互主体性」をめざして、子育て当事者自らが取り組む活動を「子育てサークル」として、本研究では位置づけた。

「第Ⅵ章　相互主体性を理念とする地域の子育て支援活動に取り組む親の主体性に関する研究－Ｎネットの親と地域の子育て家庭における相互主体性の生成過程を中心に－」においては、第Ⅴ章の結論を受けて、「地域の親と子の相互主体性」をめざして活動する親たちに焦点をあて、「地域の親と子の相互主体性」が生成する過程を実証研究として取り組んだ。本研究では、Ｎネットの親たちを研究対象として取り上げた。Ｎネットの親たちは、自己の親アイデンティティを確立したいという想いをきっかけとして、子育てサークルを作った。他の親と子の相互主体性が機能する子育てサークル活動を経験する中で、地域のもっと多くの他者と子育てのつらさや楽しさを分かち合いたい、子育てを共有したい、と

いう他者への気持ちや想いの関心である繋合希求主体性がその後の子育て支援活動の起点となった。

本研究では、「いのちのふれ合い授業」（以下、「授業」）というＮネットを象徴する活動を取り上げ、その活動を生み出す活力がどこから創出されるのか、本研究の主体性の枠組みの視点から分析することを通して、Ｎネットの親たちの主体性のありようを明らかにすることを研究目的とした。研究方法としては、「いのちのふれ合い授業」に取り組むＮネットの親を対象としてアンケート調査を実施した。「過去」「現在」「未来」という時間的な経緯における自己の内的な一貫性の視点から、Ｎネットの親たちの主体性のありようを分析した。「過去」については、「印象」をキーワードに何が主体的に活動する活力を生み出す要因であったのか、を自由記述の内容を整理することで導き出し、その結果、他者からの肯定的評価や共感が自己の「主体的アイデンティティ」における意味感の支えになっていることが示された。

「現在」については、「授業」を継続している理由の質問を通して、授業に取り組むＮネットの親の現在の関心がどこにあるのか、Ｎネットの親たちのアイデンティティを明らかにしたいと考えた。他者と自己に関心をおくそれぞれの 13 項目の質問に対して４件法による合計値を Spearman の相関分析で求めたところ、相関係数は 0.726（ｐ＜0.001）が示され、「地域のために」「地域の子どもたちのために」など他者への関心だけに囚われるのではなく、「自己の勉強」「自己の人生が豊かになる」など自己への関心もしっかりと根付いていることが示され、エリクソンの心理社会的発達課題である「世代性」が達成されていることを示した。

「未来」については、今後における「授業」に取り組む継続の意志を聞くことにより、未来における自己の能動的な意志、願望を通して授業に取り組む親の主体性のありようを明らかにしたいと考えた。方法としては、継続の意志を４件法（とても思う、思う、あまり思わない、全く思わない）で聞き、その結果を単純集計によって求めること、その理由の自由記述の内容を「関心」に視点をあてて分析することによって求めた。その結果、Ｎネットの親たちは、他者（地域の子どもや親）との関係性に関心があり、「世代性」の発達課題である「必要とされることを必要とする」が認められ、それは相互性や従属性に基づいた関係性から生まれるものであると考察した。

最後のまとめとして、地域の他者の肯定的評価や共感が、Ｎネットの親たちの「主体的アイデンティティ」における意味感の支えとなり、その主体的アイデンティティに支えら

れた子育て支援活動によって、地域の多くの子育て家庭は危機や葛藤から回復し再生してきた。Ｎネットの親と、地域の親や子どもとの相互主体性が機能する中で、Ｎネットの親たちの主体性も発達していったのではないか、と考察した。

「第Ⅶ章　相互主体性を理念とする子育て支援活動が子どもの主体性に与える影響」においては、第Ⅵ章で取り上げたＮネットの子育て支援活動で育った子どもたちに焦点をあて、相互主体性を理念とする子育て支援活動が子どもたちの主体性にどのような影響を及ぼすのか、検証することを目的とした。研究方法として、Ｎネットの子育て支援活動で育った子どもたちへのインタビュー調査を実施し､調査への協力を申し出てくれた 10 歳から 21 歳までの子ども 8 名を対象とした。分析方法としては、逐語録のデータを内容によって「Ｎネットに対する私（自己）の想い」「私（自己）に影響を与えた親の子育て支援活動」「私（自己）が捉える親の主体性」「私（自己）が捉える私（自己）の主体性」という４つに分類し、その４つの分類に対して、それぞれ萱間真美の質的分析法（グランデット・セオリー・アプローチ）を用い、オープンコーディングによってサブカテゴリを抽出し、その後、焦点化コーディングし、カテゴリを抽出した。分析の理論的視点としては、本研究における主体性理論と自己意識の重層構造の理論から考察をした。調査結果から、18 のサブカテゴリと 13 のカテゴリが導き出され、考察として以下のことを明らかにした。

①子どもが捉える親の主体性のカテゴリである「主体的アイデンティティ」「他者への関心」「他者からの肯定的評価と共感」「他者に必要とされることに意味感」は、第Ⅵ章で導き出された結果とほぼ一致する。

②子ども自身が捉える私（自己）の主体性のカテゴリである「自信」「他者への関心」は、親の主体性のカテゴリである「主体的アイデンティティ」と「他者への関心」が色濃く投影されていると考察した。子どもの主体性のカテゴリである「内在的自己の調整」は、他者と関係性を築くための内在的自己における調整であり、それは他者と相互従属の関係性にあることを、「主体的な生活体験」「乳幼児への関心」「社会的関係の広がり」「他者との関わりの学び」というカテゴリに示されるように、子どもたちはそれまでのさまざまな体験の中で学んでいるからだと考察した。

③調査結果から、乳幼児との関わりを語る内容は予想を超えるものがあった。幼い子どもたちと関係がうまくいったとき､サブカテゴリ(3)子どもたちが楽しそうにしていることが楽しかった、に示されるように、自己を抑制し調整し工夫したことで幼い子どもたちの繋合希求主体性に働きかけ、それが実って子どもたちが喜んでくれたこと、そのことに対

する自己の充足感なのではないかと考察した。つまり内在的自己を調整するその体験が乳幼児への関心を一層強め、自己への自信にもつながっていくのだと考察した。

④相互主体性が機能する関係性からの子どもたちの学びとして、母を始めとする他者との双方向の相互関係だけではなく、「サブカテゴリ：助けたり助けられたりしている」に示されるように、他者と他者の関係性からの学びという単方向の関係も含まれることが明らかにされた。「助けたり助けられたりしている」や「他者への関心」、「他者に必要とされることに意味感」などの子どもたちの主体が感じ取るキーワードは、相互主体性を理念とする子育て支援活動だからこそ、子どもが心と身体全体で感じ取ったキーワードなのだと考察した。そして、親の子育て支援活動に肯定的評価と共感を抱いていることが示され、子どもたちがそこに価値を置いていることが示された。

⑤Ｎネットの子育て支援活動を世代サイクルという視点からみると、先輩親と後輩親、一世代である親と次世代である子ども、年長の子どもと年少の子どものライフサイクルにおける心理社会的発達課題の歯車がうまくかみ合い、「世代サイクルにおけるアイデンティティの交互作用の場」であることが示された。自己肯定感を重要な要素とするそれぞれのアイデンティティは、他者の主体を肯定的に認め合う相互主体性が機能する関係性の場だからこそ、それぞれの発達段階に応じた課題に向き合うことができたのではないか、と考察した。

以上の各章によって明らかにされた研究結果をもとに、結章において以下のことを結論とした。

人の主体性が、相互主体的な関係性が機能する中で培われてきたものであるからこそ、本研究によって、「共に生きる」なかでの「他者への関心」「主体的アイデンティティ」「他者に必要とされることに意味感」というキーワードが導き出され、人はそこに、価値をおくことによって、自己の主体性が充足され、人らしい「生きる喜び」＝幸福感を感じることができると考える。子どもは、その「生きる喜び」を感じる環境の中で育つことによって、その価値が投影される主体性に育つことが本研究によって示された。「子ども」はやがて大人になり社会をつくっていく。その育った大人が、他者と「共に生きる」なかでの「生きる喜び」に価値をおき、他者に関心をもち、「他者に必要とされることに意味感」を求めることに心の充足感を得る、そんな社会的存在を前提とした人間に育つことを、本研究で求める子育て支援の目標としたい。

つまり、本研究における子育て支援の目標として、「他者と『共に生きる』なかでの『他

者に必要とされることに意味感』に価値を置くことの出来る人間、そこに生きる喜びと幸福感を見い出せる人間に子どもが育つ」ことを結論とした。そして、その目標を達成する課題として以下のようにまとめた。

①子どもが自己充実主体性と繋合希求主体性のバランスのとれた主体性をもって育つためには、家族システム理論に基づいた相互主体性が機能する環境としての子育て支援が求められる。つまり、「親と子」の相互主体性、「地域の親と子育て支援者」「地域の親と子」の相互主体性が機能する環境づくりが求められる。

②親と子の相互主体性が機能する関係性について、親が子どもの主体に働きかけることを起点として、「一緒」「基本的自尊感情」「親と子の関係性の安定」「教える」に着目した円環的関係性をつくることが求められる。

③地域の親と子育て支援者の相互主体性が機能する関係性について、親の「基本的自尊感情」を育てるための相互受容が機能する関係性をつくること、そのことによって親の主体性はバランスを回復し、親のバランスのとれた主体性によって子どもとの相互主体性が機能する関係性がつくられ、親アイデンティティが育てられる。

④他者との関係性を築くために内在的自己を調整し主体性のバランスのとれた子どもが育つために、地域の親と子の相互主体性が機能する環境づくりが求められる。それは、親と子、子育て支援者が共に活動に取り組むこと、それぞれに役割をもつことを活動の柱にすえ、他者の主体を認め合う相互受容が重要であること、異年齢の子どもとの関係づくり、内在的自己の対話と調整をすることを支援の内容に含めていくことが課題である。

⑤①～④について、何故そうするのか、を親と子育て支援者が理解することが課題である。自己の子育て支援者としての役割や自己の親として役割に意味感が与えられ、子育て支援者として、親としての主体的アイデンティティをもつことが課題である。

本研究の限界として、第Ⅵ章、第Ⅶ章において、調査対象が限定的であったことにより、結果についても限定的にならざるを得なかったこと、調査対象が母親に偏っていたことがあげられ、今後の課題としたい。

今後の研究課題として、「情緒的自立」をキーワードとして、ユニバーサルデザインの視点をもった「しつけ」プログラムを作成すること、親の情緒的自立については、親自身が終結目標をもって取り組めるような支援方法の確立をめざし、本研究で求めた子育て支援の目標により近づくために、実践を通してその方法を研鑽していきたいと考える。